2022年度（第47回）学術研究振興資金　学術研究報告

学　校　名	**龍　　谷　　大　　学**	研究所名等		
研 究 課 題	中山間地域（日伊）の農業/農村のソーシャルイノベーション研究 ―国際的・学際的な研究組織でイタリアの先進事例に学ぶ―		研 究 分 野	経　済　学
キ ー ワ ー ド	①ソーシャルイノベーション　②中山間地域　③イタリア　④若者起業・起農　⑤欧州政策			

○研究代表者

氏　　名	所　　属	職　　名	役　割　分　担
大　石　尚　子	龍谷大学 政策学部	准　教　授	研究代表者、総括

○研究分担者

氏　　名	所　　属	職　　名	役　割　分　担
秋　津　元　樹	京都大学 大学院農学研究科	教　　授	農村社会システム（理論）
石　倉　　研	龍谷大学 政策学部	講　　師	地域経済政策（農林業）
坂　梨　健　太	京都大学 農学部	講　　師	地域経済政（農業分野の雇用・人材育成）
白　石　克　孝	龍谷大学 政策学部	教　　授	EU政策（地域・教育政策）
藤　岡　章　子	龍谷大学 経営学部	教　　授	地域経済振興（6次産業化・起業）
矢　作　　弘	龍谷大学 人間・科学・宗教総合研究センター	研　究　員	地域政策（地域づくり）
Mariarosaria Lombardi	Foggia大学 経済学部	助　教　授	ソーシャルイノベーション理論・伊事例調査
Maurizio Prosperi	Foggia大学 農学部	助　教　授	調査分析方法（事例調査、ソーシャルネットワーク分析）
Francesco Defilippis	Bari工科大学 建築工学部	准　教　授	地域づくり計画（事例研究）
Mariangela Turchiaulo	Bari工科大学 建築工学部	准　教　授	地域づくり計画（事例研究）伊研究者コーディネーター

中山間地域（日伊）の農業/農村の
ソーシャルイノベーション研究
ー国際的・学際的な研究組織でイタリアの先進事例に学ぶー

1. 研究の目的

(1) **日伊の比較調査研究:**日伊の農村・農業再生の事例と政策を比較し、持続可能な中山間地域を実現するために必要な条件を明らかにすることである。具体的には、イタリア農村の社会革新の動きを、マクロ（国家・EU 政策）とミクロ（事例）の両面から調査し、日本の事例と比較し、中山間地域の農業／農村にソーシャル・イノベーション（以下 SI）を醸成するためのエコシステムを明らかにする。着目点は、外部人材が引き起こす社会システムの変容とし、その分析のために、社会革新をもたらす外部人材の①技能／経験／ネットワーク、②地域に入る（戻る）理由、③地域での就業形態、④コミュニティとどのような付き合い方をしているか、⑤その関係はどのように熟成して行くか―を分析視点とする。

(2)**イタリアの SI 醸成モデルの社会実験とその効果の検証**：南イタリアで成果を上げている農業におけるSI醸成モデルを、日本の農村で社会実験として実施し、その有用性を検証する。特に、SI 醸成に求められるのは、多様な関係性の構築である。この SI モデルは、孤立化する農業者を繋ぎ、農業者同士がお互いの農法への理解や共感、直面する課題を共有し、そこから協働や連携の動きを作り、持続可能な新しい農業の形を創出するものである。

2. 研究の計画

(1)2021年度の国内調査の整理と分析により、SIをもたらす外部人材の知識・スキル・能力を明らかにするとともに、文献分析によって抽出された農村におけるSI醸成の要件について整理する。

①共同研究者による文献調査（4月～12月）

②日本の共同研究者研究会・イタリア共同研究者とのオンライン会議

(2)イタリア南部・北部の農村におけるSI事例の調査を行いその相違を分析する。また、欧州連合・MUFPPへ訪問し、マクロレベルの農業・農村におけるSI醸成の政策についてのヒアリング調査を行う。

①8月～9月イタリア南部・北部現地調査

②3月欧州連合・国際スローフード協会・MUFPPへの訪問

(3)イタリア農村におけるSI醸成モデルの社会実験の実施、日本における有用性を検証。

2月　亀岡市との協働によるVazzapのSIキット「コンタディナー」の実施

(4)成果取りまとめ、

①龍谷大学紀要への投稿（3 月）、

②国際成果発表会開催(2 月)

③叢書出版（2024 年 3 月予定)、イタリア共同研究者との書籍出版（2024 年 6 月予定）

3. 研究の成果

(1)学際的アプローチによる農業・農村における SI についての文献調査と研究会の開催

①共同研究者の各分野から農村におけるSIについて文献調査を実施と研究会の結果、農村におけるSI醸成の要素について抽出することができた。(移民や社会的弱者の社会的包摂、都市から若者移住を促進する欧州・国家・自治体レベルの公共事業、農村・農業の担い手として変容を遂げている社会的協同組合の役割、農村・農業の新たな担い手としての女性起業家の育成、市民参加による総合的ローカル・フード・ポリシー策定を通じたSIの醸成)

②農村におけるSIの定義付けについて、文献分析に基づく論文執筆により、考察を深めることができた。また、イタリア共同研究者との研究会での議論も踏まえ、上記要素に加えて、農業・農村のSIを牽引する要素として、日本よりもイタリア・ヨーロッパで発達しているのは、ソーシャル・ファーミング、再生可能エネルギー、景観保護政策であった。特にソーシャル・ファーミングは、日本においても農福連携として注目されているが、イタリアではより幅の広い社会的課題を解決し、農業・農村のSI醸成エコシステムの中心となり

得るテーマであることがわかった。
③研究会開催は以下のとおり。

日時	場所	内容
2022年7月12日	オンライン	各共同研究者による現地調査に向けた文献調査進捗状況報告
2022年7月19日	オンライン	Prosperi氏「移民問題と南イタリア農業について」報告
2022年12月27日	龍谷大学	8,9月イタリア調査報告、2月亀岡市での社会実験の打ち合わせ 叢書執筆についての役割分担について協議
2023年2月6日	龍谷大学	龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンターとの共催により・日伊農業・農村SI国際会議を実施、日伊の共同研究者が出席し、本プロジェクトの成果・課題について日伊双方で意見交換し、今後の共同研究の方向性について協議。
2023年3月2日	オンライン	日伊共同執筆についての検討会

(2)イタリアへの農村SI事例調査及び欧州連合への農村開発政策に関するヒアリング調査を通じた仮説検証

①イタリアへの調査については、上記のSI醸成の要素を調査テーマとして、共同研究者による現地調査を実施し、それぞれの実態を掴むことができ、実際にSI醸成の牽引となっていることを把握することができた。

②欧州連合機関である欧州社会環境経済委員会の食料社会環境ユニットへの訪問調査では、持続可能な農村に求められる重要要素としてエネルギー自給の議論がなされており、農業・農村のSIには、地域資源を活用した再生可能エネルギーは不可欠であった。また、欧州連合は、国際ＮＧＯ、ＮＰＯ、協同組合、自治体連合等、多様なステークホルダーが一同に会し、熟議の場を設定し、政策提言につなげている。各団体は、アドボカシー機能を強化させていることがわかった。また農村開発政策においても、中山間地域の一地域のローカル団体が、欧州レベルの協議会に参加し活動報告・情報交換をするなど、ローカルレベルのネットワークを形成し、成果の共有と欧州政策へのアプローチの機会を得ている。

(3)日本地域におけるイタリアのルーラル・ハブVazzapの農業SIモデル「コンタディナー」の実施とその効果の検証

南イタリアの若手農業者が立ち上げた、農業・農村にSIをもたらす多様な活動を展開しており、その一つの農家同士の関係性の構築による新しい営農モデルの開発・発展を目的としたワークショップ「コンタディナー」を実施した。イタリアからVazzapの創設者、メンバーと共同研究者を招聘し、京都市左京区大原、亀岡市、小豆島を訪問し、それぞれ、ＩＵターン者による有機農業や自然農、循環型農法等の新しい農業の推進事例を調査した。日伊の農村地域の課題の共通性が明らかになったと同時に、日伊の農業者がお互いの取り組みの中に、新たに取り入れられる要素を発見することができた。

ワークショップは2023年2月5日に亀岡市との協働で実施した。定員50名のところ53名の参加となり、内農業者は22名であった。アンケート調査の結果から、ワークショップの有用性が明らかとなった。またこのワークショップをきっかけに、参加した農業者の間でネットワークと新たな農業モデルの試行が始まることとなった。本社会実験の結果、一定の成果が認められ、このSIモデルが日本においても有効に機能し、また、多様な場面で応用可能であることが示唆された。

(4)研究成果の取りまとめ

①国際会議の実施-2月にイタリア共同研究者を招聘し、これまでの活動を振り返り、その成果を確認することができた。また、トリノ工科大学とは、これまでの共同研究の実績から、2023年7月には新たに京都市にJapan Hubを立ち上げることとなり、さらに発展させることができる環境を整えることができた。

②龍谷大学紀要への論文投稿を行い、農村・農業に求められるSIの要素と、亀岡市における「コンタディナー」の社会実験結果とその成果をまとめることができた。

③本研究プロジェクトの成果は、日伊共同研究者の執筆による叢書（2024年3月出版予定）し、広く社会に発信する。またイタリア共同研究者とは、さらに、ヨーロッパ、アジア圏の研究者を新たに加えて、英書の共同執筆を進め、来年度に出版する予定である。

4. 研究の反省・考察

(1)ヒアリング調査・社会実験におけるアンケート調査のデータ分析

①Covid19の影響で現地調査が遅れたこともあり、現地ヒアリング調査のインタビュー内容の質的データ分析が不十分である。今後叢書執筆の際に精緻な分析結果を示す。

②社会実験において、ソーシャル・ネットワーク分析(SNA)が不十分である。具体的事象として、成果は提示できるが、SNAを実施するにはサンプル数が不十分であることと、もう少し経過観察が必要である。自治体との連携関係にあり、継続調査は可能であり、今後も日伊共同で追跡調査を行っていく。

(2)日伊の条件不利地域における SI の要素はある程度抽出できたが、それぞれの要素の相関関係や農村政策のマクロからミクロ、ミクロからマクロへと展開するプロセスや条件については明らかにできなかった。上記の質的データの精緻な分析と追加取材によって、明らかにして行きたい。また、農村地域の SI の議論には、日伊以外のアジア・欧米諸国の SI についても研究する必要があり、今後の課題としたい。

5. 研究発表

(1)学会誌等

①Kanang Kantamaturapoj, Steven R. McGreevy, Natapol Thongplew, Motoki Akitsu, Joost Vervoort, Astrid Mangnus, Kazuhiko Ota, Christoph D.D. Rupprecht, Norie Tamura, Maximillian Spiegelberg, Mai Kobayashi, Sittidaj Pongkijvorasin, Suwit Wibulpolprasert, 2022, Constructing practice-oriented futures for sustainable urban food policy in Bangkok. Futures, Volume 139, 102949, ISSN 0016-3287,

②秋津元輝「重層化する農山村社会のイノベーション－『脱成長』にむけた社会編成原理の転換」『季刊　農業と経済』2022年夏号、2022年8月、pp.11-23)

③秋津元輝「21世紀農山村社会のイノベーションは周縁部から芽生える」『地域と農業』（一般社団法人　北海道地域農業研究所）、第127号、2022年10月、pp.4-11)

④秋津元輝、【書評論文】「ガバナンス・アプローチの遠近法に向けて一帯谷博明『水環境ガバナンスの社会学―開発・災害・市民参加』（昭和堂、2021年）を読む一」『環境社会学研究』28、2022年、pp.156-159)

⑤矢作弘「都市空間の変容とジェンとリフィケーション－ディープ大阪（新今宮）に進出した星野リゾートをめぐって」（『おおさかの住民と自治』2022年9月pp. 12―17)

⑥坂梨健太「生業の複合性と多様性」杉村和彦・鶴田格・末原達郎編『アフリカから農を問い直す―自然社会の農学を求めて』(京都大学学術出版会、2023年2月pp.149-177)

⑦中村貴子「シビック・アグリカルチャーを農業経営の視点から捉える」『協同組合研究』42(2), 2022年

⑧中村貴子「女性農業委員を増やすための私論－まずは女性経営者を増やすこと－」(『週刊農林』第2492号、2022年8月5日)

⑨中村貴子「農業委員に女性と登用し地域と農業界を変えよう！」（『週刊農林』第2492号、2022年9月25日)

⑩大石尚子・江 欣樺「農村におけるソーシャル・イノベーションの要素と特徴―Web of Science Core Collectionの文献分析から」(『龍谷大学社会科学研究年報』第52号、2022年10月)

(2)口頭発表

①Sakanashi, K. 2022 “Debt and Living well in the Forest-A Case Study of Cocoa Growing Region in Southern Cameroon”, CHAGS13, University College Dublin, 27 June-1 July.

②Sakanashi, K. 2022 “Comparative Study on Eating Blue Alga in Japan”, IRSA 2022 XV World Congress of Rural Sociology, Cairns, Australia 19-22 July.

③中村貴子「共通テーマ：地域づくりの新段階と協同組合へのコメント」　日本協同組合学会　第40回春季大会, 2022.5.28

(3)出版物

①秋津元輝「共感する農村と都市―ツーリズムからの響き合い」河村律子・中村均司・中村貴子・高田晋史編『共感の農村ツーリズム―人の流動・経済循環を創りたい』(晃洋書

房、2023年1月、pp.6-15
②河村律子・中村均司・中村貴子・髙田晋史編著　『共感の農村ツーリズムー人の流動・経済循環を創りたいー』晃洋書房　2023年（中村貴子執筆「6次産業化と都市型マルシェ」）
③大石尚子「第13章　多様な関係性構築による農村システムの変容」（村田和代・阿部大輔編『対話を通じたレジリエントな地域社会のデザイン』）日本評論社、2022年8月、pp208-224）